

瀬戸内海の離島における生活行動と地域の魅力に関する研究

—香川県粟島をケーススタディとして—

Study about the living activity and attraction of region in remoted island in the Inland Sea - Case studies of Awashima in Kagawa -

76148 北村 修一

It is necessary to execute the measure to hold off the population decrease and declining birthrate and a growing proportion of elderly people in the remoted island in the Inland Sea. For that, it is necessary to research lifestyle of individual people, the attraction of the island, and backer person's role, and to arrange the problem by accepting a new people using that research. As a conclusion, it is to consider, not only raising the convenience of the island and making the best use of the attraction, but also how to cooperate the native people and the new people, and succeed each worth for a long time.

1. 研究の背景と目的

1-1 研究背景・目的

瀬戸内海の歴史・文化において、離島は北前船や朝鮮通信使などが航行する際に寄港地として利用するなど、重要な役割を担っていた。現在離島は急速に人口を減らしているが、これら歴史や文化を継承するためには、史跡の継続的な整備などを行っていくため、定住人口を維持・増加させる必要がある。

本研究では、香川県の一離島である粟島をケーススタディとし、島民個々の活動や役割に着目し、離島暮らしの現状や定住促進に向けた課題を分析することで、離島での居住維持のための計画を検討することを目的とする。

1-2 既往研究と本研究の位置づけ

都市計画の視点からは、統計分析を利用した類型化に関する研究や、アンケート分析による生活行動の分析が行われている。また香川県粟島においても、歴史背景をまとめた調査や高齢者の生活行動の調査等が行われている。対して、本研究は島民全体ではなく、個々の島民の行動や役割に着目する点において新規性がある。

1-3 研究方法・論文の構成

まず島民の生活行動、島の魅力、出身経緯別の島民の役割についてまとめ、これらの現状をもとに離島を当面維持するための結論を示す。次に、それらの結果をつくり出している人々について考察し、その結果をもとに新たな島民を受け入れる際の課題について分析する。

2. 瀬戸内海の島々と粟島の位置づけ

本章では、統計分析・文献調査を元に、瀬戸内海の離島およびその中の粟島の位置づけ、また島が抱える課題について整理し、ケーススタディ対象地としての粟島の意義を

示す。

2-1 瀬戸内海の離島の現状

全国に離島¹は262あり、そのうち114の離島が瀬戸内海にあり、瀬戸内海は離島が多い地域といえる。うち人口100人未満の島が49あり、小規模な離島が多いことがわかる。瀬戸内海の離島は本土までの所要時間が他地域の離島と比べて短く欠航も少ないことが特徴である²が、5分～60分とばらつきがあり、1日あたりの本数も1便～20便程度と差がある。産業は、漁業主体の島が43島と大勢だが、農業主体(22島)、製造業主体(7島)、サービス業主体(30島)の島もあるなど様々である。

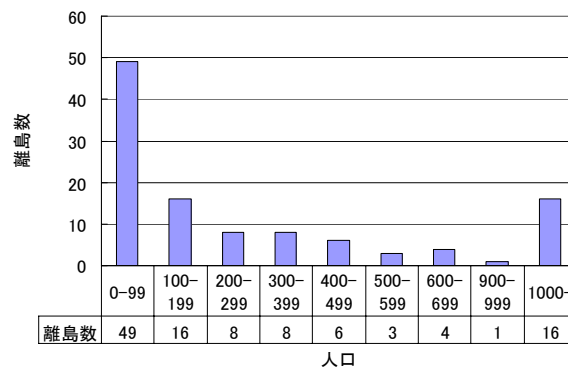


図1 瀬戸内海の人口別離島の数(2005年国勢調査)

2-2 粟島の概要と内近離島内での位置づけ

粟島は香川県西部、三豊市詫間町に位置する面積4.8km²の島である。本土からは電車・バスを乗り継ぎ、須田港から船で15分で着く。最寄りのDIDは多度津町で、粟島から45分かかる。

歴史は縄文時代に遡り、当時の生活痕跡が見られる。平

¹ 離島振興法に基づく離島振興対策実施地域に指定されている離島

² 瀬戸内海の離島の殆どは、本土にある中心的な都市から航路1時間圏内と考えられる離島、かつ航路が静穏で欠航が殆どないと考えられる離島である、「内海・本土近接型離島」に分類されている。

安時代は海賊が住む島となり、江戸時代は北前船の寄港地として栄えた。明治から昭和にかけては海員学校が置かれ、船員志望の学生や、船員を生業とする家庭が居住したことで賑わった。やがて船員の現業職に外国人が就くようになった等の影響から、1987年に海員学校は廃校になった。



図 2 粟島とその周辺都市の位置図

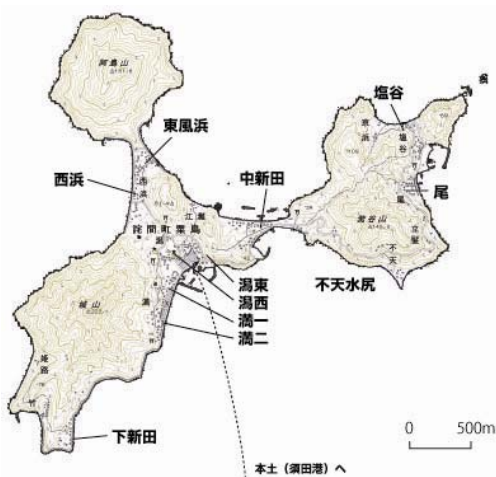


図 3 粟島全体および 11 集落の配置

人口は 1955 年には 1906 人居たが、減少を続け現在は 349 人となっている。現在島の老齢化率は 72.2%で、同程度の人口を有する瀬戸内海の島では最も高い。また子どもが居らず、小中学校は休校となっている。

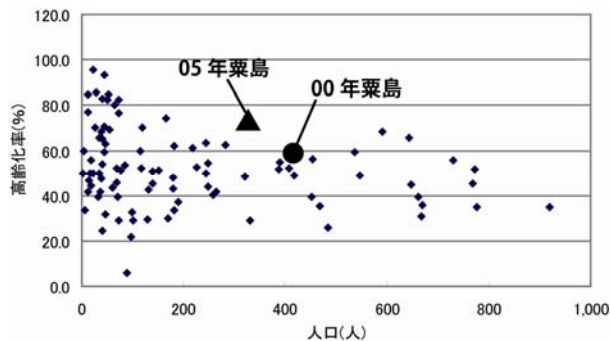


図 4 瀬戸内海の離島の人口/高齢化率の分布(2000 年国調)

島の産業は、観光業などのサービス業(70 人)、漁業(44 人)などが主体である。観光客は、夏場は海水浴客などが多いが、他のシーズンは少ない。

2-3 小結

以上のことから、粟島は本土への近接、少子高齢化、北前船や海員学校といった、瀬戸内海が有する特徴・課題・歴史性を有することがわかる。

またここで、「人口減少・少子高齢化の島でなぜ暮らせるのか」、「人口減少・少子高齢化の島でなぜ暮らし続けるのか」といった疑問が生じる。前者を次章で、後者を次々章で検討する。

3. 粟島における生活行動

本章では、2章での「人口減少・少子高齢化の島でなぜ暮らせるのか」という疑問に応えるべく、島民の生活行動とそれを支える施設・人々について整理する。地図・現地調査・既往研究に加え、島民へのアンケート・ヒアリングを行った。

3-1 島内の施設

1500 人程度の人口があった 1968 年には島に店舗が 25 店舗あったが、2008 年には 3 店舗となっている。うち食料品店が 2 店、米・衣料品店が 1 店である。しかし公共施設が充実しており、個人商店も週 1 回魚を販売する日を設けているといったことがあり、島内で最低限の生活が行える状況であるといえる。但し、個人商店による一部商品の取り寄せができなくなった、といった課題も見られる。

施設	内容	利用者数
医療	週6回診察	約35人/日
介護	週4回デイサービスセンター開設	17人
行政	出張所あり	
郵便	あり	30~40人
金融	郵便局・農協	計50~70人/日
上下水道	本土と同じ	
宅配便	配達中心の業者2軒	4~5軒/日
食料品店	2軒+農協購買	40~60人/日
衣料品店	1軒	3~5人
飲食	宿泊施設内	15人/日(年平均)

表 1 島内の施設の内容・利用者数

3-2 海上交通と本土側の交通

定期航路については、1970年に単独業者による運行になってから、1日8便体制が維持されている。1980年頃からは島民が本土側で自家用車を所有するようになり、現在その所有率は30%程度になっている。また36%の家庭が自家用船を所有している。2001年からは港と駅を結ぶバスが100円となり本数も増発、2004年からは自動車の積載ができるなど、利便性は向上している。1996年からは個人によ

海上タクシーの運行が始まり、24 時間本土との行き来ができるようになり、緊急時の対応もスムーズになった。

3-3 本土側の施設

須田港付近には 1968 年時点では 84 店舗あったが、現在は 20 店舗となっており、食堂や本屋などがなくなっている。しかし理髪店・美容室・医院などが残り、島で済ませることのできない用事を行えるようになっている。

須田港と JR 詫間駅の間では都市計画道路の整備や海岸の埋立が行われ、役場・病院・多目的施設といった公共施設、スーパーマーケット・ホームセンター等が揃う。これらの施設はコミュニティバスの沿道にあり、自動車・公共交通の両方から利用できる。

3-4 住民の主要なライフスタイル

本土への訪問頻度やその目的について島民 33 名にアンケートを行ったところ、以下のような結果が得られた。

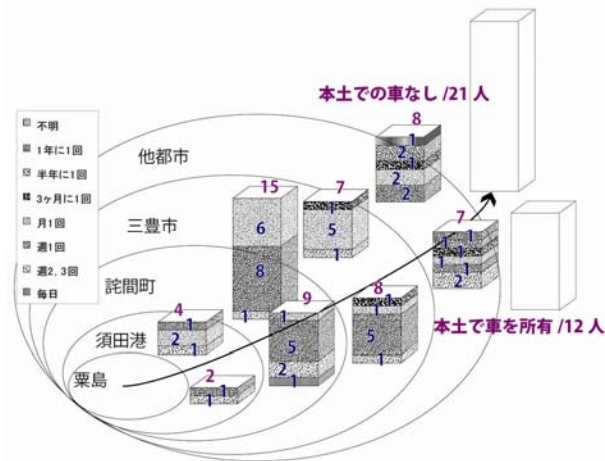


図 5 島民の本土への訪問頻度(本土での車の有無別)

本土への訪問頻度は週 1 回が最も多く、次いで週 2 回、2 週間に 1 回となった。しかし毎日本土へ訪問する人、年 4 回しか本土へ訪問しない人もおり、様々なパターンがあることが伺える。

訪問頻度や行動パターンには車を所有しているか否かで違いが見られ、車を所有していない人はコミュニティバスで直接行け、便利施設が揃う詫間町内の利用が多いのに対し、車を所有している人は詫間町内、三豊市内、その他の都市をまんべんなく利用していることが伺える。

3-5 小結

粟島においては、人口が減ったにもかかわらず、島内の施設・海上交通・本土側の施設とも利便性の維持又は向上がみられること、またそれを活かして、島民の利用においても様々な生活行動が見られることがわかった。

またこれを維持するために、公共施設の整備や維持に加え、個人商店や海上タクシーといった個人の事業者の役割が重要であることがわかった。



図 6 粟島における生活行動の変遷

4. 粟島における地域の魅力

本章では、2章での「人口減少・少子高齢化の島でなぜ暮らし続けるのか」という疑問に答えるべく、なぜ離島という不便な場所にわざわざいるのかを、離島の魅力やその維持の活動を整理することで解明する。手法として島民へのヒアリング、現地調査、既往研究調査を行った。

4-1 島の環境

離島の環境の特徴としては以下の 4 点が挙げられる。一つ目は本土から離れているが故の安心・安全という点である。ヒアリングでは、「最終便が到着したら「安全」になる」、「鍵をかけたことがない」といった声が聞かれた。

二つ目は親水性である。粟島では道路が海岸に沿って通っていること、両側に海がある集落があることなどがそれを特徴づけている。

三つ目は散策環境があることである。1827 年に当時島にあった海運業者が島中に石仏を寄進してできた「島四国八十八箇所巡り」、同様のもので「阿島山三十三観音」があり、各々を巡る散策路が島の外周を巡っている。

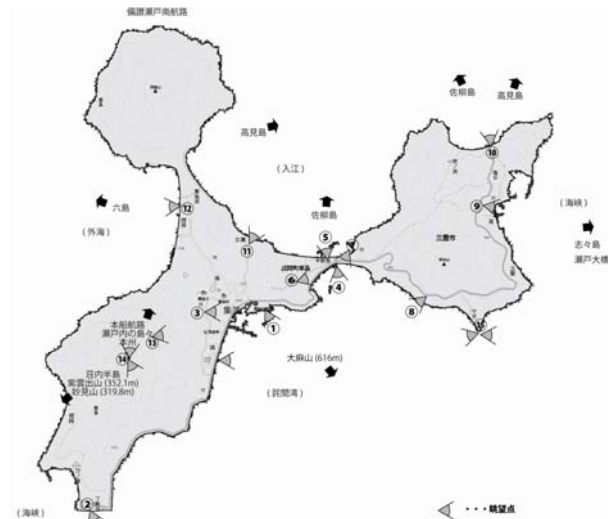


図 7 粟島における眺望

また散策路沿いにはベンチが並んでいる。さらに入り江、内海、外海といった海の特徴の違いにより、多様な眺望が得られることから、散策環境が豊かなものとなっている。

4-2 島民の人間性

島民の人間性の特徴としては、以下の3点が挙げられる。一つ目は、開放的であることである。北前船の寄港地として全国と交流があったこと、船員を志望する学生や船員が全国から来たこと、船員は島出身の女性と結婚することが多かったこと、外国との繋がりもあったことが、その理由である。

二つ目は、自給自足という点である。島では多くの家庭菜園が見られること、釣りを楽しむ人が多いことがヒアリングから伺えた。

三つ目は、積極的に動くことの難しさである。住民同士の繋がりが強固であるため、意見を言いにくい風潮がある。「波風を立てないようにしている」という意見があった。

4-3 今日まで継続されている風習

島で現在行われている風習には、「百々手まつり」と「島四国八十八箇所巡り」が挙げられる。前者は3月1日に行われる弓道のお祭りである。後者は4月の下旬に行われる、前述の遍路を歩くイベントで、島外から多くの訪問客(平日開催で約500人、休日開催で約1000人)が訪れる。各集落で来訪者をもてなすのが特徴となっている。

4-4 島民の活動

以上に示した島の魅力を維持するための活動が行われている。

まずは登山道の整備である。島の最高峰である城ノ山(222m)からは瀬戸内海の多島海美が見られるが、一時登山道が荒廃した。1976年から島民が23年間継続整備を行った結果、県が島民による自主管理という条件と引き替えに本格的に整備を行い、現在に至っている。

また島四国についても、八十八箇所巡りを開催する直前に参道の整備を行っている。

その他、公民館を使った映画鑑賞会や運動会が実施されている。

集団としての活動だけでなく、個人の活動も行われている。ある島民はブイを用いたアートを作成しており、それが展示してある庭は島の観光スポットの一つとなっている。また阿島山三十三観音も、2008年に一人の島民により10年ぶりに通れるようになった。

一方で島民の高齢化により、整備活動の継続が困難になっていることも挙げられる。島四国の参道の一部はこれにより通行できなくなっている。

4-5 小結

以上のように、粟島には地理的な特徴、歴史的な特徴、島民の人間性によりつくられた魅力があること、またそれを

維持するだけの意識の高さがあること、一方で高齢化によりそれを維持する上での課題があることがわかった。

またこれらの魅力を維持する活動には、全体で行っている活動に加え、個人で行っている活動の2通りがあることがわかった。

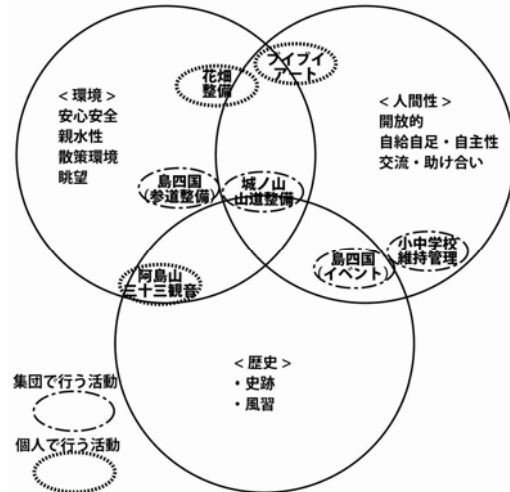


図8 粟島の魅力とそれを支える活動

5. 粟島に住む人々の役割と考え方

3章では島民の生活行動を充実させるために個人の事業者が重要であることが、4章では個人の自主的な整備活動が特徴であることが結論から得られた。本章では島民を出身別に整理することで、島民の役割について考察を深める。調査手法としてはヒアリングを用いる。島でずっと暮らしている人からIターンで島に来た人まで、また年齢も30代から80代まで様々な経緯を持つ方28人にヒアリングを行った。

5-1 島民の役割

以下の表は、生活行動におけるサービスを提供している人、島の魅力を維持する活動を行っている人を、内容ごとに分類し、また出身ごとに分類したものである。

	分類	サービス	開始時期	担当(出身別)
2章	既存のサービス	診療所		島に住み続けている人
		商店(3軒)		島に住み続けている人
		郵便局		外部
		農協		外部
		研修宿泊施設	1990 ~	外部
新規サービス (20年以内)	デイサービスセンター	2006 ~	外部	
	海上タクシー	1990 ~	Iターン者	
	民宿	1996 頃~	Iターン者・Iターン者	
	島四国八十八箇所巡り		島に住み続けている人, Iターン者	
3章	以前からの活動	百々手まつり		島に住み続けている人, Iターン者
		島四国参道整備		島に住み続けている人, Iターン者
		城ノ山の清掃	1976 ~	島に住み続けている人, Iターン者
	近年の活動	ブイアート	1998 頃~	Iターン者
		三十三観音参道再整備	2008 ~	Iターン者

表2 粟島での店舗の営業・住民活動を担当する人(出身別)

これによると、外部(本土で生活しており、島の公共施設に従事している人)を除いて、既存のサービス、以前から行わ

れていた住民活動は島に住み続けている人により行われており、近年提供されているサービスや個々の住民活動などは、U,I ターンしている人により行われていることがわかる。

また、粟島において振興活動の中心にいるのは島に住み続けている人、島の宿泊施設を運営している人(島に住み続けている人・本土から出港している人)、行政、となっている。

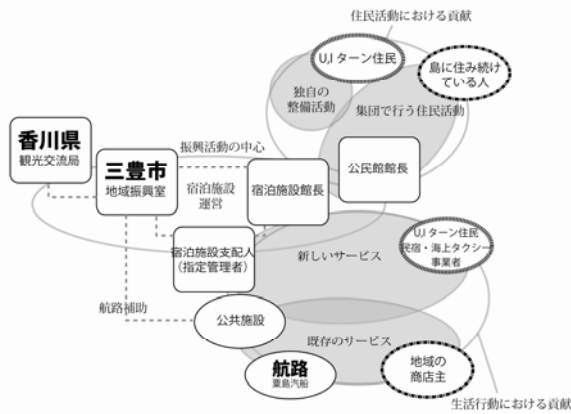


図 9 粟島における人々の役割

5-2 個々の島民の考え方の差

島に住み続けている人とU,I ターン者などでは島の良さや観光に対する考え方などが異なる。島の良さについては、島に住み続けているが安心・安全などを強調したのに対し、U,I ターン者では自然環境や人間性などを強調するといった違いが見られた。

観光に対する考え方では、島に住み続けている人は観光客の増加によりゴミ問題などが生じることが懸念されるのに対し、若い世代ではトイレ等施設がない反面広報が大々的になされている矛盾を指摘する声が見られた。

5-3 小結

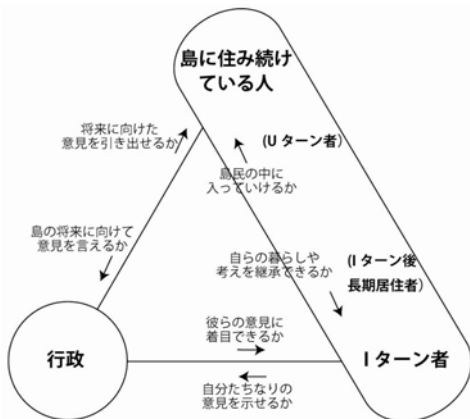


図 10 島民と行政の関係における考察

このように、粟島では島に住み続けている人と U,I ターン者がそれぞれ違った役割を担い、また考え方を持っていることがわかる。それぞれの価値を活かして離島振興を行っていくことはもちろん、今後世代交代が進んでいく中で、島に

住み続けている人が担う役割や考え方をどう継承していけるかが課題であるといえる。

6. I ターン受け入れの課題

本章では、定住人口を維持又は増加させるために I ターン受け入れを行う際の課題を整理する。調査手法は 4 章のヒアリングのデータを使用している。

6-1 I ターンを期待する対象

I ターンを期待する対象は、若い世代では現在島で職を得ることが困難であるため、定年退職後の世帯に対する期待が高い。加えて技術を持ち、離島で新たなビジネスや整備活動を行う人への期待が挙げられる。一方で定年退職者世代の発想の限界も挙げられ、いずれは若い人の柔軟な発想で島を活性化していく必要があるという意見も聞かれた。

6-2 現状で考えられている住民受け入れの課題と解決策

現在粟島で把握されている I ターン受け入れの際の課題は、以下の 2 点である。

一つ目は、受け入れ側の問題として、空き家に関する情報不足が挙げられる。現在粟島には推定で 207 軒³の空き家があるが、知人のつてがない限り家を借りられないのが現状である。これについては農水省の制度⁴を利用し、空き家情報の整理、島民関係者の名簿作成などを行うことで解決を図る予定であったが、島民による一時的な資金の立て替えが必要とされ、それが困難なため実現に至らなかった。

二つめは、金銭面・利便性・雇用の問題である。家を新築する際の負担、高齢で車の運転などに不自由があること、職業がなく若い人が暮らせないことなどが挙げられる。これについては、行政が芸術家誘致のため生活費を補助する施策を打ち出していること、若い世帯で漁業への就職に成功した実績があることなどで、解決に希望が見いだせると考えられる。

6-3 ヒアリングで生じた住民受け入れの際の課題

前節に加え、島民からは以下のような課題が指摘された。

一つめは、島民の人間性や考え方による問題である。空き家は島を出て行った人が戻るために保有している場合が多いこと、また島民が船員年金など高い年金により生活しているため、資産を有効活用しないことにより、空き家を貸してくれない状況があることが挙げられる。また I ターン者に対する拒絶反応や不信感もその理由となっている。

二つめは、I ターン者側の意識の問題である。家賃が年間約 12 万円と安いと安いため、空き家を借りたきり暮らさない、島に住み続けている人と交わらない、といったことが挙げられた。

³ 住宅地図において、住宅と考えられる建物数を抽出し、その数から島民の方による、現在居住している集落数の値を引いて算出

⁴ 農産漁村地域力発掘支援モデル事業

これらの解決策として、島に住み続けている人や島出身者の意識の改善、Iターン者側の意識の確認や移住後の制限、また島に住み続けている人とIターン者のマッチングが行える場を設ける、といったことが考えられる。

6-4 Iターン施策を実施する際の問題点と可能性

これらの解決策を講じていく際には、島民の自主性を活用していくことが望ましいが、そのみに委ねるのは限界があるといえる。現在島の振興で活躍している人物は、郵便局に勤務していた経験から、島民から信頼が得られると考えられ、個人情報への把握もできている。しかし現状維持を望む島民の声があり、積極的な行動に出にくい現状もある。

一方で、Uターンで島に戻った人の可能性が考えられる。島に住むためのノウハウの提供・支援や島民とのギャップ解消に貢献している事例が見られており、今後もその役割が重要であると考えられる。また島を出て行った人と島に住み続けている人は、同窓会などによる繋がりがあり、これを活用して移住のための情報を提供していくことも必要と考えられる。

6-5 小結

以上のことから、Iターン者受け入れのためには、空き家情報収集や生活費補助などのための資金提供の継続、島民の自主性のみならず外部識者によるノウハウの提供、Uターン者や島出身の非居住者などが持つネットワークの活用、の3点が重要であるといえる。

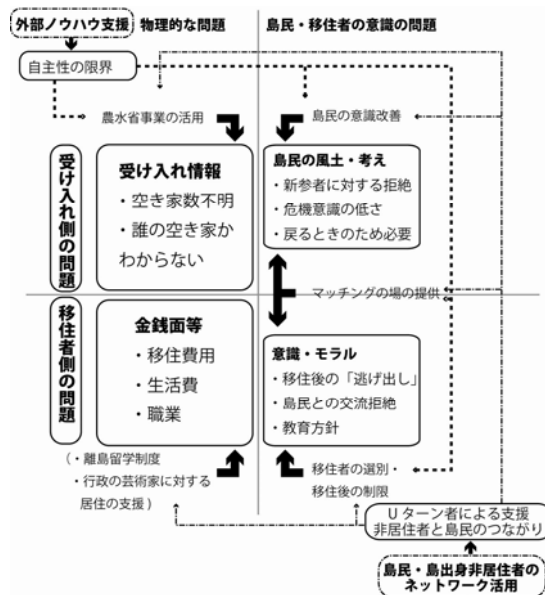


図 11 Iターン受け入れに関する問題の整理

7. 結論

7-1 現状・現状改善・将来それぞれの結論

粟島においては、人口の少ない離島であるにもかかわらず多様な生活行動が可能であること、地理・歴史的な要因

による離島ならではの魅力が存在していることがわかり、まずはこれを活かしていく必要がある。また、出身別の多様な役割により島が維持されていること、互いの役割を生かしつつ島を維持していくことが重要であること、それを活用して新たな島民を受け入れていくことが望まれることがわかった。

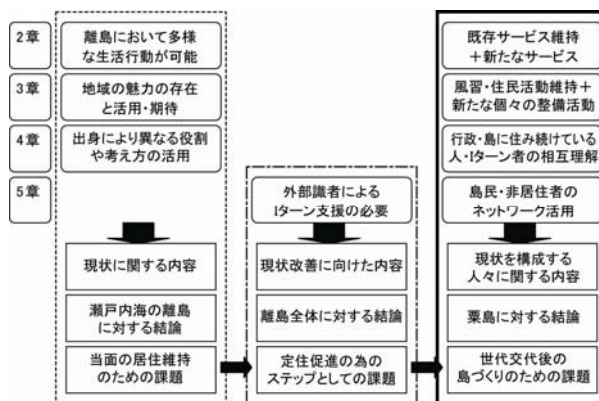


図 12 各章で得られた結論の整理

7-2 段階的な振興施策

以上のことから、振興施策は大きく三段階に分けられる。

第一段階は、現在の利便性や魅力を認識し、それを維持発展させていく段階である。粟島はこれが実現できており、今後も継続していくことが必要である。

第二段階は、後述する第三段階に至るため、移住に関する情報提供や島民間の意思疎通を図るなど、新たな島民を受け入れる体制づくりを行っていく段階であるといえる。

第三段階は、新たな島民受け入れ態勢が整った後、島に住み続けている人が育んできた文化の継承が行え、島の将来像を構築していく段階である。

このような3段階で島の振興を考えていく必要がある、ということが、本研究による結論である。

7-3 今後の研究課題

瀬戸内海の離島は本土への距離・人口・産業などが様々であり、各々の場合における生活行動や地域の魅力、またそれによる振興方法の差については、今後の研究を待つ必要がある。

また前節の第三段階を明確なものにするため、島に住み続けている人亡き後、どのように島の良さを活かして島づくりを行っていくか、またその体制についても今後研究を行っていく必要があるといえる。

参考文献

『船員の島・粟島をとりまく立地環境と空間構造の変化』、立命館大学人文科学研究所紀要(62号)、1994年3月
『粟島』、関西学院大学文化総部地理研究会、2001年11月
秋吉一郎、井内善臣、植野和文、木村良夫、松浦昭、前川晶子『離島の超高齢地域社会について—香川県粟島の場合—』、兵庫県立大学経済経営研究所、2007年6月